

主論文要旨

陶磁器（焼物）は、出土品として普遍的な存在であり、釉薬や文様・形状などが多種多様な変化を示すことから、年代差や地域差を顕著に示す重要な考古資料となっている。陶磁器の背後には、生産体制や社会的機能・時代背景などの諸側面が潜んでいるが、それを外観だけから判断するのは難しい。しかし、そのような非視覚的な諸側面は、陶磁器の重要な規定因子であり、それを追究せずには、陶磁器そのものを理解して歴史像を構築することはできない。その点を念頭に置いて、本論文では、日本古代の焼物において最も高度で複雑な技術体系を有していた、三彩・緑釉陶器などの鉛釉陶器類を取り上げ、その表層の奥に隠された歴史性を探ることに目標を据えた。

ただ、研究の現状としては、年代差や産地差などを明確にする初歩的な作業も必要な段階であるため、まずは基礎的な分析から着手した。また、考古資料の特性を生かしつつ、生産から流通・消費に至るまでの実相を明らかにすることも不可欠である。さらに、三彩・緑釉陶器の意義を理解するには、少なくとも土器・陶磁器全般との比較も無視できない。本論文では、それらの諸課題をふまえて多面的に検討を加えることにより、三彩・緑釉陶器から古代日本の歴史像の一端を抽出するように努めた。

以下、本論文の全体構成と概要を述べる。序章で示した三彩・緑釉陶器の現状と課題および用語の整理をふまえ、第Ⅰ部では、日本古代において三彩・緑釉陶器を生産した四つの地域、すなわち宮都周辺（平安京近郊など）と、東海地域、防長地域、近江地域をそれぞれ対象として、各地域で生産された製品の実体を追求するために、分類と編年の試案を提示した。また、その生産状況を復元したうえで、各生産地における基礎的な問題を論じた。形態・文様論のうち平安緑釉の模倣対象に関しては、この第Ⅰ部の第二章・第四章において扱った。その結果、輸入陶磁器模倣を確認できるが、むしろ金属器模倣が主であり、中国文物模倣と総括できることを明らかにした。

第Ⅱ部は、三彩・緑釉陶器の全般に及ぶ基礎的側面として、第一章で製作技術の問題、第二章で文献史料にみえる施釉陶器類の名称について取り上げた。いずれも、考古学と隣接領域の研究分野との総合化を企図したものであり、後章のための前提的な考察でもある。

第一章では、分析化学による成果の取り込みをめざした。まず、奈良三彩・平安緑釉の釉薬の鉛同位体比はほぼ集中する値を示し、山口県長登あるいは蔵目喜周辺産の鉛を用いていたことが明瞭となった。そして、その前後の鉛釉（鉛ガラス）の原料調達については、7世紀第3四半期頃に海外産鉛を用いる段階があり、12世紀頃には対州鉱山などから鉛の供給を受けることも明らかにした。また、釉薬の化学組成には産地差や年代差が存在することも指摘できた。さらに釉薬には粘土などが加えられていた可能性などを示唆し、原料調達や調合の実態を明確にした。

第二章では、文献史料と考古資料との橋渡しを一つの目標とした。まず「瓷器」について、10世紀後半以前は「青瓷」を指しており、その実体は基本的に国産の鉛釉陶器だと論証した。「茶碗」については、唐代において茶を飲む時に愛用した輸入陶磁器一般を指したが、『延喜民部省式』にみえる国産の瓷器に「茶碗」なる器種名が設定されたのは、そ

れが中国陶磁模倣の器種であったことも明らかにした。また、「葉椀」は緑釉陶器ではなく、植物の葉でできたものである点も確認した。語義未詳の「様器」に関しては、基本的に緑釉陶器からの技術系譜を有する白色土器であるという結論を導いた。

第Ⅲ部は、第Ⅰ部で論じた各生産地の様相を統合することによって、三彩・緑釉陶器生産の展開過程を明らかにした。

第一章では、奈良三彩から平安緑釉に変容する画期に焦点を当てた。検討の結果、9世紀前半に新たに成立する尾張と長門の生産地は、中央主導の形で畿内から技術導入していることを論証した。そして、議論が分かれていた「弘仁瓷器の伝習記事」は、工人を畿内で技術教習し、その工人を派遣して尾張や長門へ緑釉技術を移植するという過程の重要な一段階を示すもので、それは『延喜式』にみられる年料雑器の中央への収取と直結するものと考えた。また、その背景としては、弘仁期に国家的な儀式や饗宴における使用を主目的に、唐風文化を体現する高級食器としての位置付けが新たに鉛釉陶器に付与され、その国家的な需要が生産の転換に導いたものと判断した。

第二章では、第一章以降の生産の展開を扱い、生産地の拡散過程や生産体制、その史的背景などを考察した。まず、9世紀中頃には、公的用途に限定されない需要が増大したため、基本的に、その生産国内の技術により生産地拡散が行われた。この時期の緑釉陶器の生産体制としては、中央が介在する共通規範の設定のもとで、国衙による一定の関与が推測した。その後、旧来の生産国を越えて、三河・美濃・近江・丹波・周防などの新たな生産地が成立し、一層の在地的展開が起こるが、生産体制はそれ以前からの延長的な側面が残っていたと判断した。そして、11世紀前半代には、緑釉陶器生産はほぼ終焉を迎える。その背景としては、原材料の枯渇や需要の減少もあるが、むしろ旧来的な生産が維持できなくなったという、生産側の要因が大きいと考えた。

第三章では、時代をさかのぼって、平安緑釉以前の白鳳緑釉や奈良三彩を取り上げ、諸技術の伝播過程などを復元した。日本における鉛釉生産は朝鮮半島系技術を導入して開始し、7世紀中頃の百濟滅亡に伴う混乱等のなかで、朝鮮半島から日本への亡命者に、鉛ガラスや鉛釉を製造できる技術者が含まれていたと推測した。また、奈良三彩は白鳳緑釉と技術的に明確に区別され、前者の成立には、唐からの新たな技術を受け入れていたと考えざるをえない。三彩技術が日本へ導入された過程としては、遣唐使として派遣されたガラス製作技術者である「玉生」が、唐の技術をもたらしたものと推察した。

第Ⅳ部は、三彩・緑釉陶器の流通や消費の問題に焦点を当てた。

第一章は、巨視的に流通・消費を論じたのが第二・四節であり、前者では時間軸とともに遺跡の性格差を、後者では地域差を主に取り上げた。そしてさらに、一遺跡あるいは一地域の検討事例として、奈良三彩と平安緑釉のそれぞれを第三・五節で取り上げた。その結果、奈良三彩に関しては、主に宗教的な使用形態を導き出した。平安緑釉については、平安京以外では国府周辺域に出土が圧倒的に集中し、館のような施設を持つ拠点的な集落などでも多いことが判明した。そこには、平安緑釉が高級食器として流通していたことがうかがわれた。また、旧国単位で平安緑釉を産地ごとに分けてカウントした結果、西日本と東日本では産地構成が異なることから、平安京からの一元的な製品流通ではないことを明らかにした。このほか、個別事例でも、いくつかの知見を得た。例えば青森県三沢市の平畑(1)遺跡での平安緑釉の出土事例に関しては、円形周溝墓を築くような「エミシ」の

有力層が、平安京と結び付きのある人物から入手していたことを推測し、史料の少ない当該期の歴史の解明にも一材料を提供した。

第二章は、必ずしも確定的な見解に至っていない奈良三彩の代表として、正倉院の三彩陶器を取り上げ、既往の所説の根拠を問いなおし、その伝来の過程や製作契機などを復元した。まず、正倉院三彩の多くは天曆四年（950）に羅索院双倉から正倉院南倉に移納されたという通説の通りではなく、奈良時代から正倉院に納められていた可能性が高いことを述べた。正倉院三彩の製作契機としては、盤類が藤原宮子一周忌齋会に製作されたほか、鉢類の多くが大仏に対する供養具として大仏開眼会あるいは大仏関連の年中行事の開始を契機として製作された点などを推察した。

第三章では、白鳳緑釉から奈良三彩まで続く施釉埴を対象に、仏教美術史的な研究との統合化により、使用方法などの歴史的評価を見定めようとした。水波文埴はいずれも須弥壇あるいは宝殿（厨子）などに敷かれ、浄土を表現する際に用いられていたことを説明するとともに、その点から個別の歴史事象を導き出した。草創期の興福寺が川原寺の浄土表現を取り入れており、川原寺を受け継ぎつつそれに替わる四大寺としての地位を占めるようになったと判断されること、東大寺や阿弥陀浄土院の出土例などをもとに、橘三千代→光明皇后→孝謙天皇という三代の女性による阿弥陀浄土再現に向けた信仰の軌跡をたどりうることや、海外からの断続的な浄土美術の流入過程を復元できることなどを指摘した。

第四章は、消費形態を論点として、宮中などの儀礼の場における平安緑釉の使用が重要と考えることから、第Ⅲ部までの検討結果もふまえて、その歴史的意味を議論した。国家的な儀礼での緑釉陶器の使用と、そのような場を彩る建物への緑釉瓦の採用から、平安初期前後には天皇を頂点とする秩序維持のために唐風の国家的儀式の整備に対して強い関心が払われていたことを確認した。そして、平安京への遷都はその一つの画期であるとともに、全面的な唐風化を押し進める形で一応の完成点をなすのは弘仁期前後という点を、出土文物から裏付けた。また、緑釉陶器が無釉化した白色土器の歴史的意義についても、外来文化を受容したうえでの和風化の姿と評価でき、それらのなかで儀式装置の変化や継承、価値観の変容と各地での受容度などを議論しうるとした。

第Ⅴ部は、三彩・緑釉陶器を対象に含めつつも、土器類全般を取り上げることにより、その史的背景を幅広く吟味していく試みをした。いずれも、考察のなかで文献史学などから導き出されている成果を取り込み、またその検証も試みている。

第一章は奈良時代の土器などを言及する際によく引用される「律令的土器様式」あるいはその後の土器様式に関して再吟味したものである。既往の「律令的土器様式」とされるものは、「宮都型食膳具様式」と呼ぶのがふさわしく、その背景には宮内での給食の際に、盛るべき食品を機械的に振り分けるためには、法量分化した食膳具と須恵器や土師器の混用が適していたからだと想定した。そして、その様式の成立期は、藤原京の条坊制の導入以前に「京」という特別な空間が出現した頃である。それは実質的に官人等を大規模に京に集住させた時期に対応し、宮都型の食膳具の様式はシステムチックな給食体制を必要としたことが契機と考えた。

第二章では、第Ⅲ部第一章で主に論じた嵯峨朝（弘仁期）に前後する時期として、桓武朝と仁明朝を取り上げた。その土器様相を具体的に再整理するとともに、弘仁期に顕著となる唐風化への道筋が生まれた桓武朝や、弘仁期頃の極端な唐風化への反動的な動きも芽生えだす仁明朝など、古代から中世への変容過程を示す時代相を抽出した。

第三章では、平安京とその周辺に対象地域を絞りつつ、時代を奈良時代頃から中世以降までに広げて、平安京や京都の都市化の推移を推察した。第二章が時間を一定にして地域的な差異をみていくのに対して、第三章は地域を絞りつつも時間軸を広げて時期的変異を明らかにする試みである。検討の結果、出土土器からすると、京とその近郊との生活落差が顕著になるという点で、9世紀中頃に画期を見いだすことができ、史料からうかがえる都鄙意識が鮮明化する時期より先行して、生活実態としての都鄙間格差が拡大していたことが明確になった。その頃に、平安京の都市化としての大きな転換点を見いださうる可能性がある。そして、その格差は宮都の成立段階にも萌芽がうかがわれ、中世後半には相対的に均質化の方向をたどっていることが推測された。

第四章は、酒宴の器に注目して、奈良時代から中世に及ぶ変遷過程や歴史的意味を論じた。第二章が時期、第三章が地域を限定するのに対して、本章は機能を絞り込みつつ、長い時間軸での考察を試みた。そこでは、饗宴において、その内容や使用者によって多様な種類の器が使い分けている実態を整理した。そして、9・10世紀の饗宴や日常生活における土師器の頻用の要因としては、和風への再評価や穢れの除去をめざす短期廃棄などが考えられた。また、鎌倉など武家社会で土師器が儀礼的食器として多用される背景としては、京都の公家文化へのあこがれだけでなく、平安時代以来の武家の伝統を継承する側面と、和風や俗への価値を強める院政期の食器構成の反映や、武家における公家の儀礼の部分的で選択的な受容の側面が無視できない。さらに、室町時代頃から散見される武家故実としての式三献（三盃）には、公家文化における三献の「様器」、白色土器を用いることに由来すると推測され、式三献は公家文化と武家文化の融合の産物と評価した。

終章は、これまでの論及内容のまとめとして、三彩・緑釉陶器の歴史的特質について、いくつかの観点から整理した。すなわち、意匠として、奈良時代に表層上の唐風化にとどまっていたものから、平安期に全面的な中国文物を指向するようになったこと。用途として、奈良時代に宗教祭器(奉献具)であったのが、平安期に実用食器(食膳具)へと変容したこと。生産体制として、奈良時代の中央による独占状態から、平安期に地方への技術委譲した形になったこと、などの特質を抽出した。さらに鉛釉陶器の技術からみると、朝鮮半島系の鉛釉の基層技術に中国系の三彩技術が重層し、さらに日本的な伝統とも融合しつつ生産が展開していく点を明らかにした。それを他の時代の窯業技術導入とも比較すると、磁器生産の開始と類似した導入状況や時代背景が存在することにも言及した。

付章は、日本古代の三彩・緑釉陶器を考えるうえでも不可欠な存在である唐三彩についての基礎的考察である。とりわけ、日本で最も出土数の多い陶枕の諸問題や唐三彩の成立に関して、新たな視点から検討を試みた。その結果、陶枕とされるものの実際の用途については、多くの見解が提出されているが、本来は頭枕であるとみなすのがふさわしい点を示した。また陶枕などに用いられる象嵌手法を新たに意義付け、唐代の木製品にみえる木画や象嵌に類する他の手法を、陶磁器の世界に持ち込んだものであることを指摘した。そして、初期唐三彩には、従来重視されていた金属器の模倣だけでなく、木製品や漆製品などの調度品も含めて、非窯業製品がモデルとして積極的に導入されている事実を解明した。

以上述べたように、本論文においては、日本古代の三彩・緑釉陶器を中心に、文献史料や化学分析データなども含めて多面的な検証を加えることにより歴史像を構築した。